

# 統計アラカルト

熊本の統計情報 平成24年3月30日

県民の皆様に統計を身近に感じていただくためのページです。

毎月1回のペースで色々な統計に関する話題・データを紹介します。

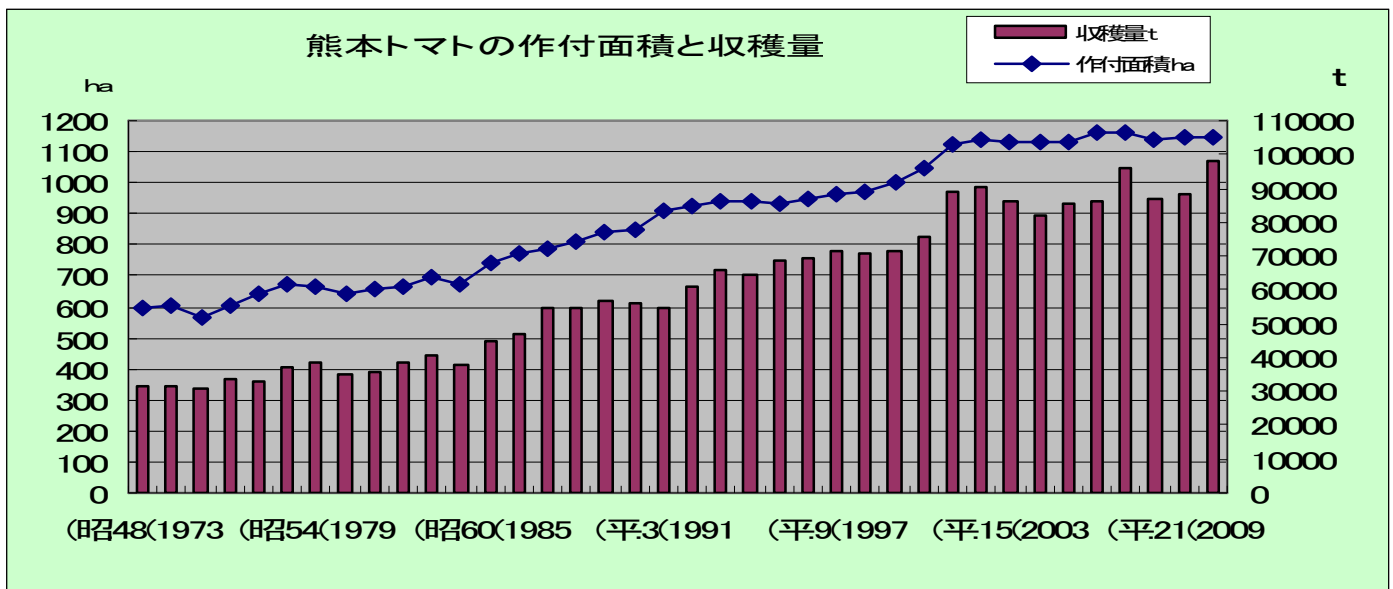
## トマトが赤くなると医者が青くなる

京都大学大学院農学研究科の河田教授らが「トマトから脂肪肝や高中性脂肪血症などの脂質代謝異常の改善に有効な新規成分を発見し、それを肥満マウスに投与して顕著な改善効果が得られることを確認した」研究成果が、平成24年2月10日(日本時間)に米国のオンライン科学誌に掲載された直後から、店頭から「生トマトやトマトジュースが品薄状態となった」というニュースを見聞きました。



農業県熊本においても、その現象があるのだろうか？ 買い物のついでに、複数店舗のトマトジュースのコーナーをのぞいて見たところ、値段が高いトマトジュースは残数があるものの、安価なトマトジュースは1本も見当たりありません。約2ヶ月経った今日でも安価なトマトジュースは在庫切れの状態です(トマトが入った野菜ミックスジュースは、栄養価が高いのに、不思議にもいっぱい並んでいるのです)。

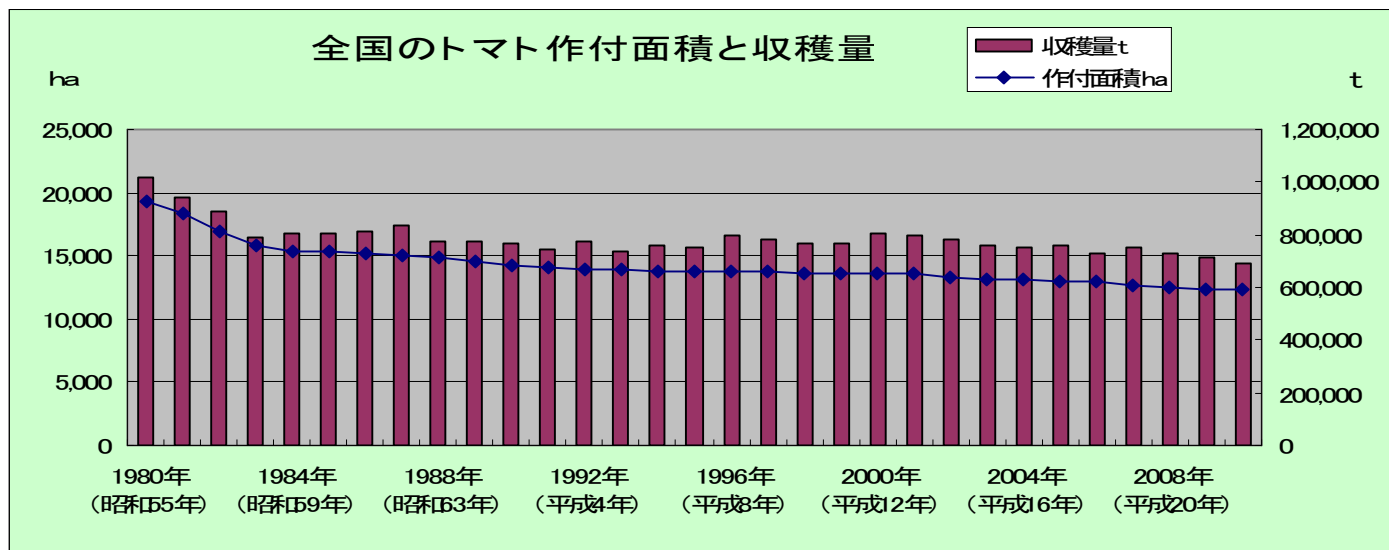
さて、昨年6月25日号の統計アラカルト「**熊本県はトマトの生産量が日本一**」にアクセスしてくれた東京の女子中学生から「**私は熊本のトマトが大好きです。熊本のトマトを夏休みの研究テーマにしています。**」という嬉しいメールが届いたり、地元熊本のテレビ局からは「**現在もトマトは日本一の生産量なんですか？**」というお尋ねがありました。そこで、「熊本県はトマトの生産量が日本一」の第2弾として、「熊本のトマト」についての情報を紹介することにしました。



(出典: 農林水産省の作物統計)

上記のグラフは、昭和48年産から平成22年産までの熊本県内におけるトマトの作付面積と収穫量を年次で捉えたものです。面積・収穫量は「冬春トマト」+「夏秋トマト」の合計数量で、ミニトマトも含んでいます。

下記グラフのとおり、全国の昭和55年産のトマト収穫量が101万4千トンであったものが、平成22年産では約69万トンにまで落ち込み、作付面積・収穫量は減少傾向にあります。熊本県はトマトの指定産地として、毎年右肩上がりに作付面積も収穫量も上昇し続けています。



熊本のトマトは、昭和55年産では全国第7位であったものが、昭和62年産では5位。昭和63年産では3位。その後は平成元年から平成4年産まで2位が続き、ついに平成5年産で日本一となり今日(平成22年産)まで不動の位置を保ち続けているのです。

平成22年産に全国収穫量に占める熊本トマトの割合は14.3%(昭和63年の約2倍)。全国2位が北海道(夏秋トマト生産が主流)、3位が愛知県、4位が千葉県となっています。

さて、「野菜王国くまもと」の「トマト」が18年間も全国1位を保ち続けている背景には、指定野菜の集団産地の指定を受け、生産、出荷及び価格安定を図るための農家などの関係者のたゆまぬ努力があるのです。

【熊本県内のトマト指定産地一覧】

区分	指定産地名
冬春トマト	八代 玉名 宇城
夏秋トマト	宇土熊本 八代 宇城 阿蘇中部 阿蘇 上益城



熊本県内の冬春トマトの収穫期は、10月下旬～6月下旬。

一方、夏秋トマトの収穫期は、7月上旬～11月下旬。トマトの旬は夏。今年の夏は、太陽の光をいっぱい浴びた完熟トマトを冷やして食べてみませんか。甘くてジューシーなトマトほど、水に沈むほどに良く、全体の色が均一で赤が濃く、皮にハリがあるトマト。またヘタやガクの部分がピンとしていて元気がよく、枯れていないトマトが新鮮ですよ。

冬春トマトは、サラダやピザなど食生活の洋風化が進み、一年間を通して需要が増えて、周年の供給に向けて産地化が拡大しました。熊本県は、完熟系のトマトを冬季の温暖で日照の多い気候を活かすハウス栽培で、大都市圏(東京・大阪など)へ出荷しているのです。

熊本県の統計情報は「 <http://www.pref.kumamoto.jp/site/statistics/> 」をご覧ください。

次回の「統計アラカルト」は、4月27日(金曜日)に掲載予定です。

問合せ先: 熊本県企画振興部統計調査課交通政策・情報局 総務資料班 〒869-8570 熊本市水前寺 6-18-1

電話: 096-333-2174 / Fax: 096-384-7544 / メール: toukeichousa@pref.kumamoto.lg.jp